

博物館と小学校社会科の連携に関する研究

—富山県小学校への質問紙調査を通して—

田尻 信壹

An Investigation into Cooperation Between Museum and Social Studies in Elementary School
:Through the Questionnaire Survey in the Elementary Schools in Toyama Prefecture

Shin-ichi TAJIRI

概要

本稿では、筆者が2009年11月に富山県の全小学校200校を対象に行なった質問紙調査を通して、博物館と小学校、特に社会科との連携について検討する。2008年3月、小学校の新しい学習指導要領が告示され、それに基づく新教育課程が2011年4月から全面的に実施される。そこでは「総合的な学習の時間」ばかりでなく、社会科、理科、図画工作科などの教科においても、博物館などの社会教育施設の積極的活用が推奨されることになった。人口100万人あたりの博物館数では、富山県は長野県、山梨県に次いで全国第3位を誇るなど、学校が博物館を活用する上で恵まれた環境にある。本稿は、前述の質問紙調査の分析を通して、県内の小学校では博物館が学校教育全般や社会科の授業でどのように活用されているのか、また、その活用にあたってどのような課題を抱えているのか等を検討し、小学校社会科における博物館の有効な活用方法について提案することを目的とする。

キーワード：博物館、小学校社会科、学習指導要領、質問紙調査

Keywords : Museum, Social studies in Elementary School, Course of Study, the Questionnaire Survey

はじめに

小学校では、1998年告示の現行学習指導要領の下での「総合的な学習の時間」の新設に伴い、学校と博物館の連携が提唱され、学校による博物館の積極的な活用が推進されることになった⁽¹⁾。また、2008年3月には、小学校の新しい学習指導要領が告示され、それに基づく新教育課程が2011年4月から全面実施される。そこでは「総合的な学習の時間」ばかりでなく、社会科、理科、図画工作科などの教科においても、博物館などの社会教育施設の積極的活用が推奨されることになった⁽²⁾。

人口100万人あたりの博物館数を見てみると、富山県は長野県、山梨県に次いで全国第3位を誇る⁽³⁾。県内の博物館数は123施設に及び⁽⁴⁾、また、その分布は富山市を中心としてほぼ全県的に分散している。博物館の種類も、歴史、自然、美術、科学に関わるもの他に、地場産業、観光、出身作家の顕彰、公害や公害訴訟運動、交通安全、町おこしに関わるものまで多岐に及んでいる(富山県博物館協会1998:11)。富山県は、学校教育、とりわけ小学校において博物館を活用する上で恵まれた環境にあると言える。

そのため、本稿では、学習指導要領改訂の趣旨や富

山県の実態を踏まえて、小学校による博物館活用の状況について、社会科での活用を中心にした質問紙による調査を、富山県内すべての小学校(200校)を対象に、2009年11月に実施した。そして県内の小学校では、博物館が学校教育全般や社会科の授業でどのように活用されているのか、また、その活用にあたってどのような課題を抱えているのか等について分析し、富山県内の小学校における博物館活用の有効な方法について検討し、提案する。

1. 博物館と新学習指導要領

「はじめに」で言及したように、小学校では、新学習指導要領の下で、「総合的な学習の時間」や教科での博物館の一層の活用が求められることになった。ここでは、博物館と小学校の連携についての議論に先だて、以下の二点について検討する。第一に、博物館とはどのような施設であるのか、博物館法に照らして整理する。第二に、博物館が小学校の学びの中にどのように位置付けられるべきか、新学習指導要領を基にして整理する。

(1) 博物館の定義と種類、施設数

まず最初に、博物館の定義と種類、全国及び富山県における施設数等について整理する。博物館は経営主体や規模、種類が多様である。また、世人の抱く博物館像も一様でない。そのため、博物館とはどのような施設なのか、その定義をすることから始める。

博物館法で言う博物館とは、「博物館」・「博物館相当施設」の2施設のことである。まず「博物館」とは、博物館法第2条によれば「歴史、芸術、民俗、産業、自然科学等に関する資料を収集し、保管（育成を含む。以下同じ。）し、展示して教育的配慮の下に一般公衆の利用に供し、その教養、調査研究、レクリエーション等に資するために必要な事業を行い、あわせてこれらの資料に関する調査研究をすることを目的とする機関（社会教育法による公民館及び図書館法（昭和25年法律第118号）による図書館を除く。）のうち、地方公共団体、一般社団法人若しくは一般財団法人、宗教法人又は政令で定めるその他の法人（独立行政法人（独立行政法人通則法（平成11年法律第103号）第2条第1項に規定する独立行政法人をいう。第29条において同じ。）を除く。）が設置するもので次章の規定による登録を受けたもの」⁽⁵⁾を言う。

また、「博物館相当施設」とは、博物館法第29条による「博物館の事業に類する事業を行う施設で、国又は独立行政法人が設置する施設にあっては文部科学大臣が、その他の施設にあっては当該施設の所在する都道府県の教育委員会が、文部科学省令で定めるところにより、博物館に相当する施設として指定したもの」とのことである。

「博物館」、「博物館相当施設」には該当しないが、これらの施設と同種の事業を行っている機関として、「博物館類似施設」がある。「博物館類似施設」とは、登録や指定を受けていないが、「博物館」、「博物館相当施設」と同等以上の規模の施設に該当するものを言う⁽⁶⁾。

学校や教員が博物館を活用する場合には、「博物館」・「博物館相当施設」と「博物館類似施設」を明確に区別して利用している訳ではない。むしろ一般には、「博物館」・「博物館相当施設」と「博物館類似施設」を区別せず、それらをすべて博物館として認識している。そのため、本稿では、「博物館」・「博物館相当施設」と「博物館類似施設」の3施設を一括して博物館として取扱うことにする。

では、全国には、博物館はどのくらい設置されているだろうか。2008年10月現在、全国の博物館の総数は、5775施設である（文部科学省による平成21年度[2009年度]「社会教育調査」<http://www.mext.go.jp/bmenu/toukei/chousa02/shakai/> 2010年8月10日確認。以下、「社会教育調査2009」と略記する。）。また、その内訳は「博物館」・「博物館相当施設」1248施設、「博物館類似施設」4527施設となる。富山県の場合は123施設で、その内訳は「博物館」・「博物館相当施設」35施設、「博

物館類似施設」88施設である。全国および富山県において、博物館の数は一貫して増加傾向にある。とくに、「博物館類似施設」については、調査対象となった1987（昭和62）年度と比較して、全国では、約3倍に増加した（「社会教育調査2009」）。

また、博物館は、その展示内容によって様々な種類に分けることができる。現在、総合博物館、科学博物館、歴史博物館、美術博物館、野外博物館、動物園、植物園、動植物園、水族館などの諸施設に分類される。博物館の内で最も多いのが歴史博物館（「博物館」・「博物館相当施設」34.9%、「博物館類似施設」63.9%、以下同じ順で示す。）で、続いて美術博物館（36.0%、14.4%）、総合博物館（11.9%、6.2%）、科学博物館（8.4%、8.4%）の順となっている（「社会教育調査2009」）。

(2) 小学校の新学習指導要領における博物館の取扱い

今次の学習指導要領改訂では、教育基本法や学校教育法の改正に伴い、知識基盤社会に対応した「生きる力」の育成を目指して、基礎的、基本的な知識・技能、思考力・判断力・表現力、学習意欲を重視し、これらを調和的に育むことが必要である旨が明示された。これらの力を育成していくためには、体験的な学習や問題解決的な学習の充実を図るとともに、児童による自主的、自発的な学習を促すことが肝要となる。そのため、学校教育における学びの形態として、学校と博物館などの社会教育機関との連携の重要性が認識されるとともに、博学連携の下で学校教育による博物館の積極的活用が提案された。そして、「総合的な学習の時間」や各教科において、博物館の活用が「指導計画の作成と内容の取扱い」の留意事項として取り上げられることになった。

では、新学習指導要領における博物館活用に関する記述について、以下に挙げる。

○総合的な学習の時間

2（6）学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などの工夫を行うこと（文部科学省2008：111）。

○社会

1（3）博物館や郷土資料館等の施設の活用を図るとともに、身近な地域及び国土の遺跡や文化財などの観察や調査を取り入れるようにすること（同上：41）。

○理科

1（3）博物館や科学学習センターなどと連携、協力を図りながら、それらを積極的に活用するよう配慮すること（同上：70）。

○図画工作

2（5）各学年の「B鑑賞」の指導に当たっては、児

童や学校の実態に応じて、地域の美術館などを利用したり、連携を図ったりすること（同上：87）。

新学習指導要領のもとで、「総合的な学習の時間」ばかりでなく、社会科、理科、図画工作科などの各教科での博物館の積極的活用が求められることになった。

2 小学校での博物館活用に関する調査

ここでは、博物館と学校教育の連携に関する調査の先行事例について整理する。筆者の管見では、近年実施された全国規模の調査として、財団法人・河川情報センターによる『博物館の教育的利用に関する調査報告』（1998）と、財団法人・日本博物館協会による『博物館総合調査』（2005）がある。

（1）河川情報センターによる調査

河川情報センターによる『博物館の教育的利用に関する調査報告』は、「全国博物館総覧」から無作為に抽出した100施設に対して、1997年に実施したものである（回収率83%）。同調査は、「博物館の学校教育への利用協力体制」「児童・生徒が博物館を利用した場合の対応」「過去の児童の訪問時のこと」「博物館の説明員・学芸員等」「博物館の展示内容」「博物館の学習用資料等」「博物館の施設等」「博物館の特別展示」「博物館の運営全般」に関する内容（52項目）から構成されていた。同調査では、61%にあたる博物館が「学校と社会との教育機能としての連携、協力体制の強化」を要望し、「学校カリキュラムとの連携」を願っていることが分かった（河川情報センター1998：5）。また、66%に当たる博物館が学校教育面への支援として、特別の出版物、印刷物、パンフレット、ワークシート等の準備をしているとのことであった（河川情報センター1998：14）。筆者の管見でも、近年、博物館による児童・生徒用ワークシート等の研究や作成が数多く見られるようになってきた⁽⁷⁾。

（2）日本博物館協会による調査

日本博物館協会による『博物館総合調査』は、文化庁の委嘱事業（博物館振興施策に関する調査事業）として、1974年から2004年まで7回に渡って実施されてきた。直近の調査である2004年の場合には、全国3930施設に調査票を送付し、2030施設から回答があった（回収率51.7%）。同調査は「総論」と「特論」の二部構成・24項目から構成されており、「総論」では、「博物館の組織と経営」「博物館経営の経済的基盤」「博物館経営の社会的基盤」「展示と教育普及活動」など、また「特論」では、「総合博物館」「郷土博物館・歴史博物館」「美術館」など館種ごとの調査が行われている。同調査によれば、博物館の活動として、相変わらず「展示活動」が中心であるが、近年は活動の重点を「教育普及活動」に置く傾向が強まっ

ている（日本博物館協会2005：8-9）。また、「博物館の学校教育との連携・協力」の例（表1「2004年調査 学校との連携・協力の状況—前回（1997年）調査との比較—」を参照）としては、「遠足・修学旅行等行事来館」「授業の一環としての来館」する形態が大半である。さらに、近年では、「行事として学校が団体に来館すること」が減少し、「学芸員が学校に出向いて児童・生徒を指導すること」「教員対象の講座や講習会を開くこと」の割合が増加している。

表1 2004年調査 学校との連携・協力の状況—前回（1997年）調査との比較—
（単位 %）

学校との連携・協力	1997年	2004年	差
行事として学校が団体に来館すること	84.7	80.8	-3.9
授業の一環として児童や生徒が来館すること	92.6	94.3	1.7
学芸員が博物館で児童や生徒を指導すること	50.1	55.7	5.6
学芸員が学校に出向いて児童や生徒を指導すること	16.5	33.0	16.5
教師に来館のための事前オリエンテーションをすること	38.8	38.5	-0.3
教員対象の講座や講習会を開くこと	15.0	22.3	7.3
学校に資料や図書を貸し出すこと	34.2	34.4	0.2
特定の学校と博物館を利用した教育実践の研究をすること	7.2	11.0	3.8
学校週5日制土曜日に対応する事業をすること	23.1	25.3	2.2

* 1997、2004年の数字は、学校との連携・協力が「よくある」ないしは「時々ある」博物館の割合。

* 出典：日本博物館協会編『博物館総合調査』、2005年、12頁（一部改変）

前述の2調査は、実施者と調査対象者がどちらも博物館であり、「博物館側から見た調査」であると言える。今回、筆者が実施した調査は教育関係者（教員）による小学校（及び教員）を対象にした調査であり、前述の2調査とは調査実施者及び調査対象が異なり、「学校側から見た調査」である。そのため、筆者の調査と前述の2調査は、相互に補完する関係にある。まさにこの点において、本調査を実施する意義を見い出すことができる。

3 博物館を活用した小学校社会科の実態

～授業での活用の現状と課題に関する分析～

筆者は、富山県における博物館を活用した小学校の活動、特に社会科授業の実態を把握するために、2009年11

月に、県内の全小学校200校を対象に、質問紙による調査「博物館を活用した社会科授業の調査」を実施した。
本調査の方法と内容については、以下の通りである。

(1) 質問紙の項目と内容

まず、質問紙の項目の内容と方法を以下に示す。

質問1 学校名および回答者のお名前をご記入下さい。

質問2 勤務校では、ここ一年間(2008年11月～2009年10月)に博物館を活用したことがありますか。

- a.ある b.ない

質問3 「質問2」で「ある」と答えた方にお聞きします。

質問3-ア その施設はどこにありますか(富山市の学校の場合は、bcについてはcをお選び下さい)。また、該当する場所が複数ある場合には、すべてあげて下さい。

- a.学区内, b.郡市内(市町村内), c.富山市,
d.富山市を除く県内, e.県外

質問3-イ その博物館は次のうちのどの施設ですか。複数ある場合には、すべてあげて下さい。

- a.富山県立近代美術館, b.富山市郷土博物館(富山城),
c.富山県埋蔵文化財センター, d.広貫堂資料館,
e.水墨画美術館, f.清流会館, g.水橋郷土資料館,
h.魚津埋没林博物館, i.魚津歴史民俗博物館,
j.滑川市立博物館, k.ほたるいかミュージアム,
l.立山カルデラ砂防博物館, m.高岡市立博物館,
n.高岡市万葉歴史館, o.新湊市博物館,
p.氷見市立博物館, q.小矢部ふるさと博物館,
r.砺波郷土資料館, s.チューリップ四季彩館,
t.井波歴史民俗資料館, u.五箇山民俗館・硝煙館,
v.石川県立歴史博物館(金沢市),
w.その他(具体的に名称をあげて下さい)

質問3-ウ それは、どんな目的で利用されましたか。

- a.遠足, b.社会見学, c.社会科の授業,
d.総合的な学習の時間, e.その他(具体的に)

質問3-エ 今までに社会科の授業の中で利用したことがありますか。

- a.ある, b.ない

質問3-オ 今後、社会科の授業の中で利用する予定がありますか。

- a.ある, b.ない

質問3-カ 「質問3-エ」で「ある」と答えた方にお聞きします。何年のどの単元で利用しましたか。

- a.3・4年の地域学習(具体的に)
b.5年の産業学習(具体的に)
c.6年の歴史学習(具体的に)
d.6年の国際理解学習(具体的に)

質問3-キ 「質問3-オ」で「ある」と答えた方にお聞きします。何年のどの単元で利用しますか。

- a.3・4年の地域学習(具体的に)

- b.5年の産業学習(具体的に)

- c.6年の歴史学習(具体的に)

- d.6年の国際理解学習(具体的に)

質問3-ク 「質問3-エ」で「ある」と答えた方にお聞きします。どのような方法で実施しましたか。

- a.教師が引率して、児童に見学させた。
b.教師のみが見学し、教材研究に利用した。
c.児童のみが見学した。
d.博物館の出前授業等を利用した。
e.その他(具体的に)

質問3-ケ 「質問3-エ」で「ある」と答えた方にお聞きします。見学によってどのような効果が見られましたか(自由表記)。

質問3-コ 「質問3-オ」で「ある」と答えた方にお聞きします。どのような方法で実施される予定ですか。

- a.教師が引率して、児童に見学させる。
b.教師のみが見学し、教材研究に利用する。
c.児童のみが見学する。
d.博物館の出前授業等を利用する。
e.その他(具体的に)

質問4 「質問2」で「ない」と答えた方にお聞きします。博物館などの見学に代わる学習として、どのような学習方法の工夫をしておられますか。具体的にお書き下さい(自由表記)。

質問5 博物館を利用する上で問題がありましたら、具体的にお書き下さい(自由表記)。

(2) 調査の方法

上記3(1)に示した質問票を郵送し、回答の上返送(郵送)して頂いた。学校に関わる質問については、回答者に学校の状況を調べて回答するようにお願いした。

(3) 調査の期間

調査の期間は、2009年11月1日から11月20日までの20日間とした。

(4) 調査数と回収数(回収率)

2009年度における富山県内の全小学校200校を対象に実施した。期日(2009年11月20日)までの回収数(回収率)は143校(71.5%)であった(「表2」参照)。

本調査は小学校を対象に実施した調査であり、児童の生活や学習活動の範囲が居住する学区や市町村であることを考慮し、集計結果の分析にあたっては、全県的な傾向と小学校が所在する郡市ごとの特色の双方について分析ができるようにするために、「県全体」及び「郡市別」に分けて集計を行うことにした。

表2 (質問1) 調査校数と回答数・回収率

	郡市別	学校数(校)	回答数(校)	回収率(%)
1	下新川郡	9	6	66.7
2	黒部市	11	7	63.6
3	魚津市	13	11	84.6
4	滑川市	7	6	85.7
5	中新川郡	16	12	75.0
6	富山市	64	37	57.8
7	射水市	16	14	87.5
8	高岡市	27	22	81.5
9	氷見市	14	12	85.7
10	小矢部市	5	4	80.0
11	砺波市	8	6	75.0
12	南砺市	10	6	60.0
	県全体	200	143	71.5

(5) 調査の集計と分析

本調査の集計と分析に当たっては、13の項目(学校名と回答者名について伺った「質問1」を除く。「質問2」から「質問5」までの各項目)を、①富山県における博物館活用の実態、②社会科での博物館活用の実態と今後の計画、③小学校で博物館を活用する上での課題の、三つの内容に分けて分析することにした。

①富山県における博物館活用の実態について

質問2 勤務校では、ここ一年間(2008年11月～2009年10月)に博物館を活用したことがありますか。
a.ある b.ない

表3 (質問2) 県内小学校のここ一年間の博物館活用状況

	郡市別	回答校	ある	ない	「ある」の割合
1	下新川郡	6	5	1	83.3
2	黒部市	7	7	0	100.0
3	魚津市	11	11	0	100.0
4	滑川市	6	2	4	33.3
5	中新川郡	12	11	1	91.7
6	富山市	37	35	2	94.6
7	射水市	14	12	2	85.7
8	高岡市	22	22	0	100.0
9	氷見市	12	12	0	100.0
10	小矢部市	4	4	0	100.0
11	砺波市	6	6	0	100.0
12	南砺市	6	6	0	100.0
	県全体	143	133	10	93.0%

「ある」と回答した小学校は133校(93.0%)であり、県内のほとんどの小学校でここ一年間に博物館を活用した活動を行っていた。「はい」と回答した教員が必ずしもその学校で博物館を活用したということではないが、全県で9割を超える小学校で博物館を活用した活動が行われていることは、富山県における博物館教育の普及の広がり示すものと言える。とくに県西部の郡市(高岡市、

氷見市、小矢部市、砺波市、南砺市)では、回答したすべての小学校が博物館を活用した活動を行っていた。

続いて、質問2で「ここ一年間(2008年11月～2009年10月)に博物館を活用したことがある」と回答した小学校に対して、以下の質問(質問3-アから質問3-ウ)を行った。

質問3-ア その施設はどこにありますか(富山市の学校の場合は、bcについてはcをお選び下さい)。また、該当する場所が複数ある場合には、すべてあげて下さい。
a.学区内 b.郡市内 c.富山市
d.富山市を除く県内 e.県外

表4 (質問3-ア) 小学校が活用した博物館の所在地(複数回答有り)

	郡市別	回答校	学区内	郡市内	富山市	富山市を除く県内	県外	計
1	下新川郡	5	0	1	1	2	3	7
2	黒部市	7	1	2	3	4	3	13
3	魚津市	11	1	10	1	4	1	17
4	滑川市	2	0	2	1	0	1	4
5	中新川郡	11	1	7	6	2	0	16
6	富山市	35	3	—	27	13	3	46
7	射水市	12	1	6	9	6	0	22
8	高岡市	22	4	13	14	6	4	41
9	氷見市	12	0	9	2	0	3	14
10	小矢部市	4	1	3	2	3	1	10
11	砺波市	6	1	5	2	0	3	11
12	南砺市	6	2	2	2	1	4	11
	県全体	133	15	60	70	41	26	212

図1 富山市内の小学校が活用した博物館の所在地

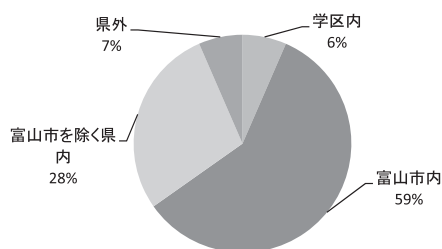
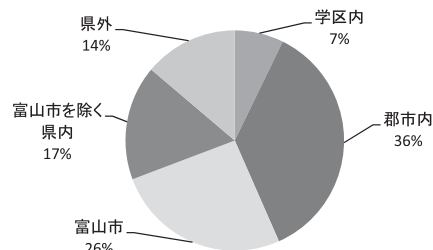


図2 富山市を除く県内の小学校が活用した博物館の所在地



県全体でみると、活用した博物館の所在地として、調査校のある「学区」内が15校(7.1%)、「郡市内」が60校(28.3%)と、県内の代表的な博物館が集中する「富山市」内が70校(33.0%)となり、これらの地域で、全体のほぼ7割を占めた。また、「県外」の利用は26校(12.2%)であった。

郡市別でみると、富山市の場合は「学区」内と「富山市」内を併せると65%である(「図1」参照)のに対して、富山市を除く郡市の場合は「学区」内・「郡市」内で43%であった(「図2」参照)。富山市を除く地域の小学校が博物館を活用する場合には、学校がある市町村から富山市などへ出かけなければならない実態が明らかになった。また、県外の博物館については、県西部の小学校を中心に利用されていた。

では、県内の小学校が利用している博物館として、どんな施設があげられるだろうか。

質問3-イ その博物館は次のうちのどの施設ですか。複数ある場合には、すべてあげて下さい。
～選択肢は省略～

表5(質問3-イ) 県内の小学校が活用した博物館(複数回答有り)

博物館の名称	所在地	回答数
a. 富山県立近代美術館	富山市	9
b. 富山市郷土博物館(富山城)	富山市	10
c. 富山県埋蔵文化財センター	富山市	30
d. 広貫堂資料館	富山市	3
e. 水墨画美術館	富山市	1
f. 清流会館	富山市	3
g. 水橋郷土資料館	富山市	0
h. 魚津埋没林博物館	魚津市	1
i. 魚津歴史民俗博物館	魚津市	13
j. 滑川市立博物館	滑川市	2
k. ほたるいかミュージアム	滑川市	4
l. 立山カルデラ砂防博物館	中新川郡	39
m. 高岡市立博物館	高岡市	9
n. 高岡市万葉歴史館	高岡市	5
o. 新湊市博物館	射水市	4
p. 氷見市立博物館	氷見市	10
q. 小矢部ふるさと博物館	小矢部市	4
r. 砺波郷土資料館	砺波市	4
s. チューリップ四季彩館	砺波市	4
t. 井波歴史民俗資料館	南砺市	2
u. 五箇山民俗館・硝煙館	南砺市	3
v. 石川県立歴史博物館(金沢市)	石川県	29
w. その他		70

「w.その他」としてあげられた施設を以下に列举する。博物館名に付記された()内は、博物館所在地の郡市名(富山県外については県名)と回答数を示す。

[富山市]回答数:39

富山市民俗民芸村(富山市・18)、富山市科学文化センター(富山市・11)、富山県交通公園交通安全博物館(富山市・1)、北前回船問屋「森家」(富山市・1)、越中八尾観光会館(富山市・1)、山田村歴史民俗資料館(富山市・1)、大山町歴史民俗資料館(富山市・1)、八尾おわら資料館(富山市・1)、八尾和紙館(富山市・1)、北日本新聞社越中座(富山市・1)、越中八尾曳山展示館(富山市・1)、自然博物園ねいの里(富山市・1)。

[富山市を除く県内]回答数:23

沢スギ自然館(下新川郡・1)、入善町農村資料館(下新川郡・1)、うなづき友学館(黒部市・1)、魚津水族館(魚津市・1)、富山県[立山博物館](中新川郡・8)、弓の里歴史文化館(中新川郡・1)、新湊みなと交流館(射水市・1)、イクリの里(射水市・1)、海王バードパーク(射水市・1)、下村民俗資料館(射水市・1)、高岡市美術館(高岡市・1)、獅子舞ミュージアム(氷見市・1)、五箇山和紙の里(南砺市・1)、荘川町水資料館(南砺市・1)、瑞泉寺宝物館(南砺市・1)、平村和紙工芸館(南砺市・1)。

[富山県外]回答数:8

金沢伝統工芸産業館(石川県・1)、金沢21世紀美術館(石川県・1)、藩老本多蔵品館(石川県・1)、九谷焼資料館(石川県・1)、コスモアイル羽咋(石川県・1)、白川郷野外博物館(岐阜県・1)、高山陣屋(岐阜県・1)、高山市郷土資料館(岐阜県・1)。

今回の調査では、富山県内の小学生が活用した博物館としては、58施設(富山市19、富山市を除く県内30、県外9)があげられた。これらの施設の内、10校以上の小学校が活用していた博物館は、以下の8施設であった。8施設を種類(館種)別に分けると、歴史博物館が6施設、科学博物館が2施設であった。

- ・立山カルデラ砂防博物館(中新川郡立山町)39校
- ・富山県埋蔵文化財センター(富山市)30校
- ・石川県立歴史博物館(金沢市)29校
- ・富山市民俗民芸村(富山市)18校
- ・魚津歴史民俗博物館(魚津市)13校
- ・富山市科学文化センター(富山市)11校
- ・富山市郷土博物館(富山城)(富山市)10校
- ・氷見市立博物館(氷見市)10校

富山県内の小学校が最も活用している立山カルデラ砂防博物館⁽⁸⁾は、立山カルデラの大自然と砂防をテーマとする博物館で、屋内展示館と立山カルデラを観察できる野外ゾーンから構成されている。同町には、13ヘクタールの敷地をもつ広域分散型の博物館で、立山信仰と立山

の自然を紹介した富山県〔立山博物館〕もあり、こども8校が活用していた。両方の博物館には、延べ47校の小学校が活用していた。富山県の小学校の多くが夏季に立山登山を行っていることもあり、登山と立山カルデラ砂防博物館博物館、富山県〔立山博物館〕の見学をリンクした計画を立てていることがその背景にあると考えられる。立山カルデラ砂防博物館と富山県〔立山博物館〕は、富山県を代表する二大博物館であり、どちらも館内展示と野外ゾーンを併せ持っている。そのため、文化と自然の学習が可能であることから、多くの小学校によって利用されている。

富山県埋蔵文化財センター⁽⁹⁾については、「ふるさと考古学教室」「考古学キッズ」などの各種講座や「出前授業」「来館授業」など多彩な教育普及活動を行っていることがその理由と考えられる。

石川県立歴史博物館（金沢市）⁽¹⁰⁾については、歴史・民俗に関する総合的展示が行われており、同館に匹敵する規模の歴史博物館は富山県には存在しない。同館では、児童のための「歴史体験コーナー」が設置されており、各時代を代表するテーマを選択して、実物資料を実際に手に触れることができるなどの工夫が見られることも大きな魅力である。



石川県立歴史博物館（金沢市）
（2009年1月19日撮影）



実際に着用できる甲冑（石川県立歴史博物館）
（2009年1月19日撮影）

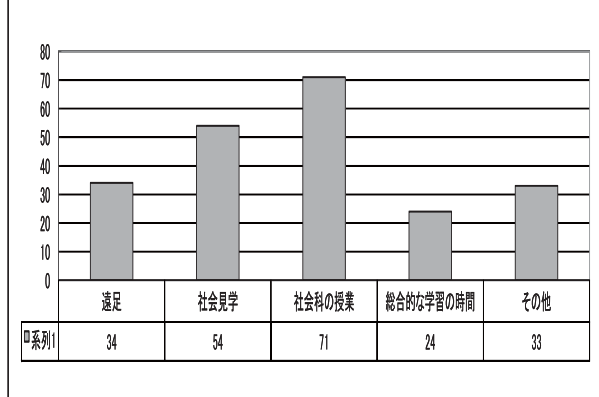
では、小学校は博物館をどんな目的で利用したのか。

質問3ーウ それはどんな目的で利用されましたか。
 a. 遠足 b. 社会見学 c. 社会科の授業
 d. 総合的な学習の時間 e. その他（具体的に）

表6（質問3ーウ）小学校が博物館を活用した目的（複数回答有り）

	郡市別	回答校	遠足	社会見学	社会科の授業	総合的な学習の時間	その他	計
1	下新川郡	5	4	1	0	0	1	6
2	黒部市	7	4	0	3	0	3	10
3	魚津市	11	4	3	9	2	0	18
4	滑川市	2	0	1	2	0	0	3
5	中新川郡	11	1	5	6	4	4	20
6	富山市	35	3	20	20	10	9	62
7	射水市	12	7	8	6	3	3	27
8	高岡市	22	5	10	7	0	9	31
9	氷見市	4	2	2	7	1	2	14
10	小矢部市	3	1	1	3	0	0	5
11	砺波市	6	1	2	5	2	0	10
12	南砺市	6	2	1	3	2	2	10
	県全体	133	34	54	71	24	33	216

図3（質問3ーウ）小学校が博物館を活用した目的（県全体）



博物館活用の目的として、「社会科の授業」が71例と最も多く、「社会見学」54例、「遠足」34例と続いた。「社会科の授業」での活用が多いことについては、県内の小学生が活用した博物館として、富山県埋蔵文化財センター、石川県立歴史博物館などの歴史博物館が多数を占めたことから頷ける（「表5」参照）。反面、「総合的な学習の時間」での活用は24例と少なく、現行学習指導要領の下で博物館等との連携や積極的な活用が提唱されたが、富山県内では、利用がそれほど進んでいない状況が浮き彫りになった。また、「その他」と答えた33例の目的については、「社会科以外の教科」が19例（その内訳は、理科6例、国語科1例、図画工作科5例、「ものづくりデザイン科」7例である。）と多く、続いて「宿泊合宿」12例、「出前授業」1例、「教員研修」1例であった。「ものづくりデザイン科」⁽¹¹⁾とは、高岡市が市内の

児童・生徒が地域の伝統産業を体験的に学習させることを目的に、市独自に設置した科目である。

小学校では、博物館活用の目的として、社会科などの教科での活用が全体の41.7%（90例）を占めており、「遠足」などの学校行事での活用は15.7%（34例）であった。現行学習指導要領で博物館活用の中核に位置付けられている「総合的な学習の時間」の活用は11.1%（24例）にすぎなかった。今回の調査では、小学校での博物館の活用は教科中心であることが分かった。

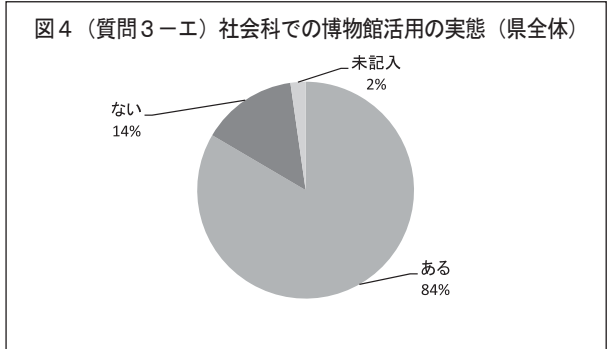
②社会科での博物館活用の実態と今後の計画について

ここでは、小学校における博物館の活用の実態と今後の計画について、社会科に焦点を当てて分析する。質問2で「ここ一年間（2008年11月～2009年10月）に博物館を活用したことがある」と回答した小学校に以下の質問（「質問3-エ」から「質問3-コ」まで）を行った。

質問3-エ 今までに社会科の授業の中で利用したことがありますか。
a. ある b. ない

表7（質問3-エ）社会科授業での博物館活用の実態

	都市別	回答数	ある	ない	未記入
1	下新川郡	5	4	1	0
2	黒部市	7	5	2	0
3	魚津市	11	9	2	0
4	滑川市	2	1	1	0
5	中新川郡	11	9	1	1
6	富山市	35	31	4	0
7	射水市	12	9	2	1
8	高岡市	22	18	3	1
9	氷見市	12	10	2	0
10	小矢部市	4	4	0	0
11	砺波市	6	6	0	0
12	南砺市	6	5	1	0
	県全体	133	111	19	3



質問2で「はい」と回答した教員の中で、84%が今までに社会科の授業で博物館を活用したことが「ある」と回答した。「質問3-ウ」でも、博物館活用の目的として、

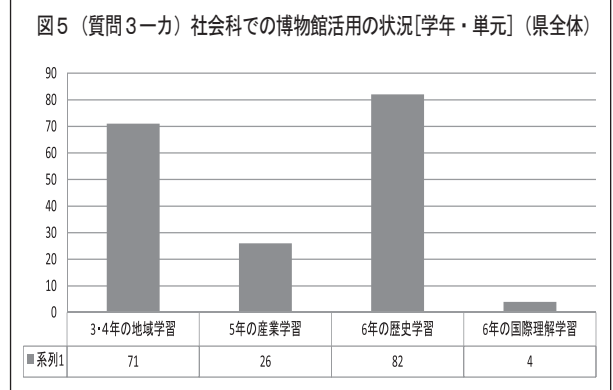
「社会科の授業」が最も多かった（「図3」参照）。このことから、小学校での博物館活用においては、社会科の授業がその中核を占めてきたと言える。

では、社会科の授業では、博物館はこれまでにどのように活用されてきたのだろうか。「質問3-カ」で実施した学年と単元について、聞いてみた。

質問3-カ 「質問3-エ」で「ある」と答えた方にお聞きします。何年のどの単元で利用しましたか。
a. 3・4年の地域学習（具体的に）
b. 5年の産業学習（具体的に）
c. 6年の歴史学習（具体的に）
d. 6年の国際理解学習（具体的に）

表8（質問3-カ）社会科での博物館活用の状況（学年・単元）（複数回答有り）

	都市別	回答校	ある	a	b	c	d
1	下新川郡	5	4	3	0	3	0
2	黒部市	7	5	3	2	5	0
3	魚津市	11	9	6	1	8	0
4	滑川市	2	1	1	0	1	0
5	中新川郡	11	9	4	1	5	0
6	富山市	35	31	21	7	27	2
7	射水市	12	9	6	4	6	0
8	高岡市	22	18	11	7	11	1
9	氷見市	12	10	6	3	5	1
10	小矢部市	4	4	3	0	3	0
11	砺波市	6	6	4	0	3	0
12	南砺市	6	5	3	1	5	0
	県全体	133	111	71	26	82	4



社会科の博物館活用の学年と単元は「3・4年の地域学習」（71例）と「6年の歴史学習」（82例）に集中した。それに対して、「6年の国際理解学習」はわずか4例にすぎなかった。

「3・4年の地域学習」では、「昔の暮らしと古い道具」、「きょう土をひらく」、「きょう土に伝わるねがい」などの単元で博物館を活用する事例が目立った。洗濯板などの「古い道具」に触れることで「昔の暮らし」が身

近に感じられ、学習への関心が高まるとともに、昔の生活や仕事に対する理解の深まりと現在の自分たちの生活を振り返る契機となるなどの効果が指摘された。また、椎名道三⁽¹²⁾や石黒信由⁽¹³⁾などの地域の発展に貢献した先人の事跡を学ぶために博物館を訪問したり、地域の生活や労働を体験するために、児童が生活している学区内や郡市内の博物館を活用するなどの例が見られた。

「5年の産業学習」では、「水産業と私たちの生活」「山間部の暮らし」などの単元でその地域に根ざした産業や生活を調べたり、「鱒の鮓」や「売薬」などの地場産業やイタイイタイ病など公害の実態や反公害の運動について学習したりする事例が挙げられていた。また、自然や環境の学習に役立たせるなどの試みもみられた。

「6年の歴史学習」は、「3・4年の地域学習」と並んで、原始から現代までの歴史に関する多くの多様な活動や事例が紹介されていた。火おこしや土器・勾玉づくりなどを通じての体験学習、児童が生活している学区内や郡市内の博物館展示や史跡（例えば、古墳など）見学を通じての郷土史学習は、児童にとって、歴史への関心や興味を促すなどの効果が期待できる。

「6年の国際理解学習」で活用したのは、4例にすぎなかった。具体的な内容についても、示されていない。しかし、県内には、国際理解教育に活用できる博物館が決してないわけではない。以下に、国際理解教育に活用できる博物館を紹介しよう。南砺市には、日中友好に貢献した政治家・松村謙三の記念館（松村記念会館，南砺市福光5260）があり、氏の記念館の展示を教材に国際理解について扱うことができる。また、富山市の富山県教育記念館（富山市千歳町1-5-1）には、戦前に米国から日本各地の学校に送られた「青い眼の人形」が展示されており、国際交流を扱う際の有効な教材である。近年の国際理解教育では、ユネスコを中心に「世界遺産教育」が提唱されている。1995年には、富山県、岐阜県にまたがる「白川郷五箇山の合掌つくり集落」が世界遺産に登録された。五箇山の相倉民俗館（南砺市相倉）等の合掌つくり集落を題材に授業を行うことが可能である。このように、富山県には国際理解教育の教材となりえる博物館があるので、今後の有効な活用が望まれる。

次に、博物館の活用は、どのような方法で実施されていたのか、見てみよう。

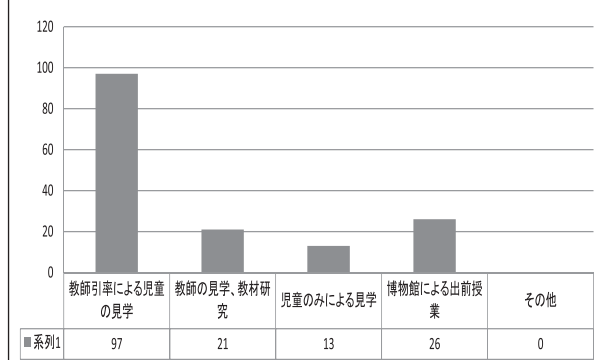
質問3-1ク「質問3-1エ」で「ある」と答えた方にお聞きします。どのような方法で実施しましたか。

- a. 教師が引率して、児童に見学させた。
- b. 教師のみが見学し、教材研究に利用した。
- c. 児童のみが見学した。
- d. 博物館の出前授業等を利用した。
- e. その他（具体的に）

表9（質問3-1ク）社会科での博物館活用の状況（実施方法）（複数回答有り）

	都市別	回答校	ある	a	b	c	d	e
1	下新川郡	5	4	4	0	0	0	0
2	黒部市	7	5	6	1	0	2	0
3	魚津市	11	9	8	0	0	3	0
4	滑川市	2	1	3	0	0	0	0
5	中新川郡	11	9	7	1	1	3	0
6	富山市	35	31	26	8	2	9	0
7	射水市	12	9	10	2	1	2	0
8	高岡市	22	18	16	3	1	5	0
9	氷見市	12	10	6	4	2	2	0
10	小矢部市	4	4	3	0	2	0	0
11	砺波市	6	6	4	0	4	0	0
12	南砺市	6	5	4	2	0	0	0
	県全体	133	111	97	21	13	26	0

図6（質問3-1ク）社会科での博物館活用の状況[実施方法]（県全体）



活用方法としては、「教師引率による児童の見学」が97例と、全体の6割を占めた。この方法は、遠足、校外活動や社会科などの教科指導の一環として、実施されてきたオーソドックスな活用方法である。このような形態の利用は、教員の事前準備や引率指導での負担が大きい。また、効果的な利用のためには、学芸員による指導や小学生用のガイドブック、ワークシート等の作成など博物館側の教育支援体制の充実が不可欠である。

この面での、富山県「立山博物館」の取り組みは、大変参考になる⁽¹⁴⁾。同館は、その敷地内に展示館のほか、



富山県「立山博物館」(2010年7月28日撮影)

定重要文化財)、有馬家(町指定重要文化財)、かもしか園などの施設が点在する広域分散型の博物館である。同博物館のホームページには、訪問時間等に

わせて、13の見学モデルコースが公開されている。また、学校が見学する際の手引きや施設紹介のために、見学手引き『「たてはく」へ行こう!』(全28頁)を刊行している。内容は「施設紹介」(7頁)、「見学手引き」(4頁)、「見学方法」(4頁)、「ワークシート」(8頁)、「参考資料」(3頁)から構成されており、見学の際の計画を立てたり、それぞれの学校の児童の実態に応じた学習ができるように配慮されている。

続いて、「博物館による出前授業」が26例(16.6%)



富山県立埋蔵文化財センター
(2010年6月4日撮影)



出前授業に使うキット
(富山県立埋蔵文化財センター)
(2009年6月30日撮影)

となった。博物館によるこのような試みは、近年、増加している形態である(日本博物館協会、2005、12頁)。ではその例として、富山県埋蔵文化財センターの取組みを紹介する⁽¹⁵⁾。同センターでは、小学校向けの出前授業の利用案内リーフレットを作成し、県内の学校に配布している。また、実際の出前授業では、講話のほか、ハンズオン、体験などのメニューが用意されている。また、当日、依頼校周辺の遺跡からの出土品を持参し、学区内の遺跡等を取り上げるなどの工夫に努めている。その結果、2003年から始まった出前授業の利用学校は、2009年までの7年間に延べ135校に達している。昨年の「出前授業」参加学校は37校、参加生徒・児童数は1950名であった。

また、「教師の見学、教材研究」は21例(13.4%)であった。教員の授業づくりを支援していく上で、この方法は大変有効な手段であると言える。

博物館を活用したことによる効果について、伺った。

質問3-ケ 見学によってどのような効果が見られましたか。

代表的な意見を以下に挙げる。

- a. 出土品から当時の人々の暮らしについて、イメージを膨らませることができた。学芸員からの専門的

な歴史解説や資料紹介は子どもの好奇心を刺激し、本気にさせることができた。

- b. インターネットやパンフレットなどの資料から調べたことが、実際に見学することで調べたことを確かめることができ(「実際に見学することによって確認することができ」の意味か。筆者挿入)、理解が深まった。
- c. 実際に県内で出土した土器に触ることができ、写真や文章などでは分からない質感や重量感が実感できた。また、自分たちの身近な場所の大昔の生活について知ることができ、地域の歴史への関心が高まった。
- d. 実際に火起こしやまが玉づくりを体験することによって大昔の生活を体感することができ、体験を通しての実感のある理解が深まった。

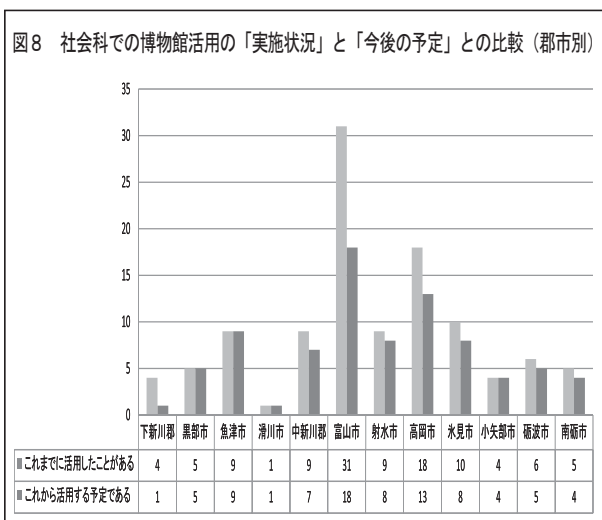
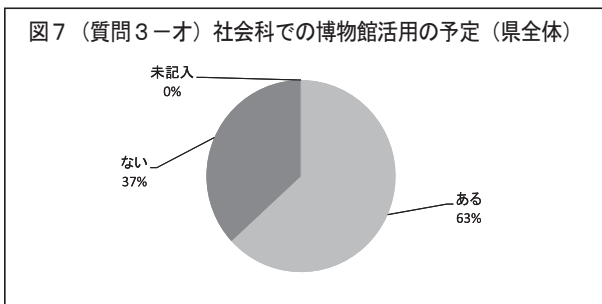
博物館を活用した学習上の効果として、実際に実物を見られることや、博物館の中には展示品に触れたり操作したりすることができる場所もあり、リアリティのある理解が可能になったことがあげられた。多くの博物館で体験を通して楽しく学習することができるようになり、学習への興味・関心を高めることが可能となっているとの指摘もあった。また、地域史に関する学芸員の専門的解説や地元出土の考古資料に基づく情報は、児童が生活する身近な地域の理解を図る上での貴重な体験となっており、子どもたちの好奇心を刺激し、学習への動機付けとなったとの指摘も寄せられた。

社会科の授業における博物館活用の今後の予定については、どうであろうか。

質問3-オ 今後、社会科の授業の中で利用する予定がありますか。
a. ある b. ない

表10(質問3-オ) 社会科授業での博物館活用の予定

	郡市別	回答校	a	b	未記入
1	下新川郡	5	1	4	0
2	黒部市	7	5	2	0
3	魚津市	11	9	2	0
4	滑川市	2	2	2	0
5	中新川郡	11	7	4	0
6	富山市	35	18	16	0
7	射水市	12	8	4	0
8	高岡市	22	13	8	0
9	氷見市	12	8	4	0
10	小矢部市	4	4	0	0
11	砺波市	6	5	1	0
12	南砺市	6	4	2	0
	県全体	133	84	49	0



社会科で博物館を今後、活用する予定が「ある」との回答は84人(63%)であった(「図7」を参照)。これまでの社会科の授業で博物館を活用したことが「ある」との回答が111人(84%)であったこと(「質問3-エ」を参照)と比べると、27人の減少である。博物館を「活用したことがある」(「表7」参照)と「活用する予定である」(「表10」参照)を郡市ごとに比較してみると、「黒部市」「魚津市」「小矢部市」を除く9郡市で博物館を「活用する予定がある」との回答が「活用したことがある」を下回った(「図8」参照)。この結果は、調査が年度途中の11月に実施されたため、来年度の予定がまだ立っていない状況であったことが要因として考えられる。また、富山市、高岡市などの市部での減少の幅が大きいことから、近年、市部の教員を中心に見られる校務の多忙感がその背景にあると思われる。

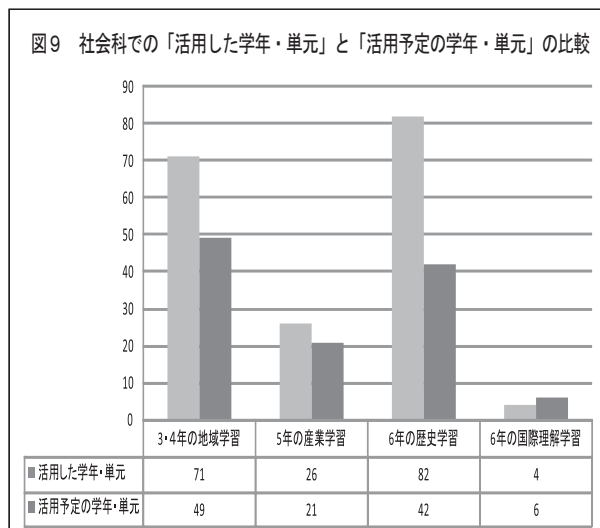
次に、社会科で実施する予定が「ある」と回答した方に、実施予定の学年と単元について聞いてみた。

質問3-キ 「質問3-オ」で「ある」と答えた方にお聞きます。何年のどの単元で利用しますか。

- a. 3・4年の地域学習(具体的に)
- b. 5年の産業学習(具体的に)
- c. 6年の歴史学習(具体的に)
- d. 6年の国際理解学習(具体的に)

表11 (質問3-キ) 社会科での博物館活用の予定(実施学年・単元)(複数回答有り)

	都市別	回答校	ある	a	b	c	d
1	下新川郡	5	1	0	0	1	0
2	黒部市	7	5	4	3	3	0
3	魚津市	11	9	7	2	6	1
4	滑川市	2	2	1	0	2	0
5	中新川郡	11	7	2	2	3	0
6	富山市	35	18	10	3	10	2
7	射水市	12	8	5	4	4	1
8	高岡市	22	13	6	3	5	0
9	水見市	12	8	6	4	3	2
10	小矢部市	4	4	3	0	1	0
11	砺波市	6	5	2	0	2	0
12	南砺市	6	4	3	0	2	0
	県全体	133	84	49	21	42	6



「6年の歴史学習」で博物館を利用する予定であるとの回答は42例である。「6年の歴史学習」で活用したことがあったとの回答が82例であったのと比べると、半減している(「図9」を参照)。また、「3・4年の地域学習」においても、以前に博物館を活用したことがあったとの回答が71例であったが、今後、活用する予定であるとの回答が49例に減少するなど、教員の間で博物館の活用を敬遠する傾向が高まっている。「5年の産業学習」と「6年の国際理解学習」については、回答した数も少なく、大きな変化はない。新学習指導要領では、博物館の活用が社会科の授業で推奨されていることを考えると、今回の調査に見られる結果は深刻な状況であると言える。

最後に、博物館の活用にあたって、どのような方法で実施するのかを聞いてみた。

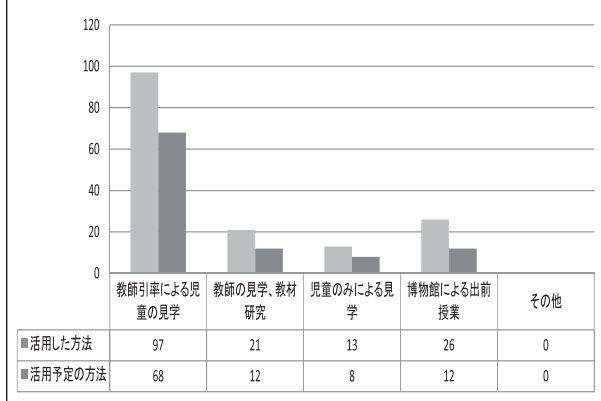
質問3-コ 「質問3-オ」で「ある」と答えた方にお聞きします。どのような方法で実施される予定ですか。

a. 教師が引率して、児童に見学させる。
 b. 教師のみが見学し、教材研究に利用する。
 c. 児童のみが見学する。
 d. 博物館の出前授業等を利用する。
 e. その他（具体的に）

表12（質問3-コ）社会科での博物館活用の予定（実施方法）（複数回答有り）

	都市別	回答校	ある	a	b	c	d	e
1	下新川郡	5	1	1	0	0	0	0
2	黒部市	7	5	4	1	0	0	0
3	魚津市	11	9	7	1	1	4	0
4	滑川市	2	2	2	0	0	0	0
5	中新川郡	11	7	5	1	0	1	0
6	富山市	35	18	15	3	3	3	0
7	射水市	12	8	7	1	0	1	0
8	高岡市	22	13	11	2	3	1	0
9	氷見市	12	8	5	1	1	1	0
10	小矢部市	4	4	4	0	0	0	0
11	砺波市	6	5	5	0	0	0	0
12	南砺市	6	4	3	2	0	1	0
	県全体	133	84	69	12	8	12	0

図10 社会科での「活用した方法」と「活用予定の方法」の比較



博物館活用の実施方法については、実際に「活用した方法」と今後の「活用予定の方法」とも、最も多かったのが「教師引率による児童の見学」で、回答数の3分の2を占めた。近年、その割合が増加している「博物館による出前授業」や「教員対象の講座や講習会」に関して、実際に活用した時よりも活用予定の方が減少している。富山県の場合、比較的小規模な博物館が多いため、博物館による「出前授業」や「教員対象の講座や講習会」などの教育普及活動を実施できない状況がある。また、富山県埋蔵文化財センターなどの博物館では「出前授業」

を積極的に実施しているが、小学校現場では、まだまだそのことが周知されていない。

③小学校で博物館を活用する際の課題について
 授業で博物館を活用しない（できない）場合には、それに代わる方法として、どのような工夫を行っているのか、聞いてみた。

質問4 「質問2」で「ない」とお答えになった方にお聞きします。博物館などの見学に代わる学習として、どのような学習方法の工夫をしていらっしゃいますか。具体的にお書き下さい。

学習上の工夫としてあげられた主な意見を、以下に列挙する。

- a. インターネットなどでの調べ学習を行う。道具・資料などを借り、教師が中心となって行う。
- b. ビデオなどを利用した。
- c. 工場や会社の見学。実物（自動車の部品や昔の道具など）を持ち込んだ授業を行った。
- d. 教科書、地域の副読本で調べたり、家族から聞く。地域の方を学校に呼んで出前授業をしてもらう。インターネットを使っての学習、社会科学習ソフトを使っての学習を行った。
- e. 図書館、情報学習室での調べ学習、講師を招いての講話、インタビューを行った。
- f. 写真等実物でない物で代用している。本当は見学を行って施設の方にお話を聞いた方が良いと分かっているのだが、時間や費用の面で難しい。

博物館を活用した学習の代替として、インターネット、ビデオ、社会科学習ソフトの活用、写真、実物等の教室内への持込みをあげられた。また、講師（ゲストスピーカー）を学校（教室）に招いての講話や工場・会社への訪問などもあった。インターネットやビデオなどの活用は、時間的地理的な問題で博物館を活用できない学校の場合には、モノのイメージを具体的に認識する上で大変有効な方法であると言える。博物館の中には、学校への写真や所蔵品（実物）の貸し出し（アウトリーチ）や講師派遣を行っている機関もあるので、それらの制度を有効に活用する必要がある。

最後に、小学校で博物館を活用する上での課題について聞いた。

質問5 現在の博物館を利用する上で学習面の問題がありましたならば、具体的にお書き下さい。

博物館を利用するに当たっての学習上の問題としてあげられた意見として、主なものを以下に列挙する。

- a. 授業内容や授業、行事等で学習が過密になっており、なかなか遠くに行ってみ学できる余裕がない。

見学のための準備に時間がとられるので、見学に割ける時間が確保できない。

- b. (子供の育ちの変化から) 博物館の訪問のためのマナー指導、届け出書類作成が年々重要性を増してきていること。
- c. 教師自身が博物館について十分に分かっていない。学習に生かすための事前の準備の時間がなかなか取れない。博物館に行くための交通手段の確保が難しい。
- d. 中世・近世の資料をそろえ、子供たちに対応した施設が県内にない(福井、石川、新潟にはいずれもすばらしい県立の博物館がある)。
- e. 博物館展示の表記や表現方法が小学生には難しすぎるものが多い。解説者の言葉も難解で小学生には理解しにくい場合が多い。
- f. 実際に手に触れたり、体験したりすることができない(実際に触れることができれば、より理解が深まる)。博物館まで遠く、気軽に何度でも足を運べない。
- g. 出前授業がない場合、日頃、予算面での制約がある。もっと活用したいが、学区内にない場合は、計画できず、残念に思っている。出前授業を増やしてほしい。
- h. 学習効果を高めるためには、学芸員の皆さんと十分に打ち合わせしたいが、なかなか時間がとりにくい。日頃より、博物館の発行する広報誌、パンフレット、ホームページをチェックし、情報収集をしておく必要がある。また、利用後は、成果を確認したり、教育現場の要望や利用についての感想を伝えたり、博物館側の意見を伺ったりして、相互に意見交換につとめ、人的ネットワークをつくっていけるとよい。
- i. 学習の進度と見学の時間を一致させるのが難しい。春先は学校行事が多いので、都合がつきにくいところがある。また、教師が事前に下調べに出かける時間がとりにくい。
- j. 校外に出る時間が十分にとれないため、資料の借用などの工夫が必要である。学校近くに博物館・資料館がなく、見学に行くにしても、バス代等の負担や時間が必要以上にかかってしまうなど、何回も見に行くことなどが出来ない。保護者のバス代や入館料の負担が大きい。

学校や児童に関わる問題として、博物館の展示説明(表記や表現方法)が小学生には難しすぎることや、カリキュラムの進度に合わせて適切な時期に博物館訪問の時間を確保するのが困難であることがあげられた。また、日常の授業が過密であるため、多くの学校では、博物館訪問などの校外活動に時間を費やすほどの余裕がないとのことであった。

また、教員側の抱える問題として、多忙な校務のため

博物館側との連絡調整や博物館訪問の事前準備や事後学習の時間が十分に確保できない状況が指摘された。

博物館の訪問に際しての問題点としては、学区内に適切な博物館がなく、そのため富山市や県外の博物館へ行かざるを得ず、その結果、博物館への交通手段が確保できなかったり、バスのチャーター代や交通費などの経済的負担が大きいことがあげられた。また、校外活動に伴う児童に対するマナー指導や、関係機関への提出書類の準備が大変なことも指摘された。

おわりに

小学校では、2011年度から新学習指導要領に基づく新教育課程に全面的に移行する。新教育課程の下では、知識基盤社会に対応した「生きる力」の育成を目指して、体験的な学習や問題解決的な学習の充実を図るとともに、児童による自主的、自発的な学習を促すことが求められる。そのため、学校教育における学びの形態として、学校と博物館などの社会教育機関との連携の重要性が認識された。その結果、「総合的な学習の時間」ばかりでなく、社会科、理科、図画工作科などの教科においても、博物館などの社会教育施設の積極的活用が推奨されることになった。また、富山県内には、多くの博物館が設置されており、教育資源としての有効活用が大いに期待されている。

本稿では、新学習指導要領改定の趣旨や富山県のこのような状況を踏まえて、小学校による博物館活用の状況について、社会科での活用を中心に、富山県内すべての小学校に対して、質問紙による調査を実施した。

本調査では、富山県内の9割を超える小学校で、社会科などの教科を中心として博物館を活用した活動が行われていることが分かった。しかし、博物館の活用の中核となることが期待されている「総合的な学習の時間」での博物館活用の例は少ないことが判明した。

社会科での博物館活用は、「3・4年の地域学習」と「6年の歴史学習」に集中しており、「6年の国際理解学習」の実践はほとんど見られなかった。また、活用方法は「教員引率による博物館訪問」が中心であり、教員は訪問に当たっての事前準備や児童の指導に困難さを感じており、博物館への移動のための時間的・経済的負担も大きい。そのため、多くの学校では、博物館を「第二の教室」として頻繁に活用できる状況にない。

また、社会科における博物館の今後の活用予定についての調査では、これまでの活動の実績を下回る結果となった。その理由として、本調査が年度途中の11月に実施されたため、来年度以降の予定がまだ立っていないと言う事情が想像される。また、富山市、高岡市などの市部での減少の幅が大きいことから、市部の教員を中心に見られる校務の多忙感もその理由として考えられる。

以上、博物館を小学校の教育全般や社会科の授業で

のように活用されてきたのか、また、その活用にあたってどのような課題を抱えているのか等について整理し、分析した。博物館を「第二の教室」として有効に活用していくためには、「教員引率による博物館訪問」に偏る活用を見直していく必要がある。そして、小学校の教育活動全般、とくに社会科の授業で博物館を効果的に活用するための方法として、以下の二点を提案して、本稿の結語とする。

第一に、学校（教員）と博物館（学芸員）との連携を図り、両者の協力・連携の下で児童の発達段階や学校カリキュラムに対応した展示解説・ワークシートの作成を進め、博物館を体験的学習、問題解決的学習の場とするシステムの構築を目指す。

第二に、博物館による写真・レプリカを含む展示品の学校への貸し出し（アウトリーチ）や学芸員による出前授業などを充実させ、博物館に頻繁に行けなくとも、学校（教室）で博物館の学習を体験できるようにし、日常の授業改善と活性化に博物館での学びを活用することを旨とする。

註

- (1) 「総合的な学習の時間」での博物館の活用については、現行学習指導要領の下で「学校図書館の活用、他の学校との連携、公民館、図書館、博物館等の社会教育施設や社会教育関係団体等の各種団体との連携、地域の教材や学習環境の積極的な活用などについて工夫すること」（小学校学習指導要領「総則」1998年告示、2003年一部改正）と規定された。
- (2) 小学校の新学習指導要領（2008年告示）での「総合的な学習の時間」、社会、理科、図画工作における博物館等の取扱いについては、本稿「1. 博物館と新学習指導要領」の該当箇所を参照のこと。
- (3) 「100の指標統計から見た富山<平成21年度版>」（<http://www.pref.toyama.jp/sections/1015lib/shihyo>. 2010年8月10日確認）によれば、2008年10月現在の富山県の博物館数は35施設（出典：文部科学省「社会教育調査報告書」）であり、人口100万人あたりの博物館数で見ると、長野県の37.8施設、山梨県の33.3施設に次いで、富山県は31.8施設（全国第3位）である。なお、全国の平均は9.8施設である。
- (4) 2010年3月現在、富山県内の博物館数は、「博物館」32施設、「博物館相当施設」3施設、「博物館類似施設」88施設の、計123施設である（2010年8月9日、富山県教育委員会への照会）。「博物館」「博物館相当施設」「博物館類似施設」については、本稿「1. 博物館と新学習指導要領」の該当箇所を参照のこと。
- (5) 博物館の登録については、博物館法第2章を参照のこと。
- (6) 「博物館類似施設」の規定については、文部科学省による平成21年度「社会教育調査」「I. 調査の概要」（http://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/chousa02/shakai/. 2010年8月10日確認）の博物館調査の規定に基づく。
- (7) 博物館による児童の活動のためのワークシートに関する研究としては、青木正邦「博物館と学校教育との連携—ジュニアワークシートを利用した小学校の実践を通して」・「博物館と学校教育との連携Ⅱ」（『富山県〔立山博物館〕研究紀要』第2・3号、1995・1996）、小島道裕「ワークシートによる家族向け教育プログラム—『れきはく親子クイズ』の実践結果から—」（『国立歴史民俗博物館研究報告』第108集、2003）、佐藤哲・長坂喜郎「小学生のための見学ワークシートの作成とその活用」（『千葉県立現代産業科学館研究報告』第10号、2004）などがある。
- (8) 立山カルデラ砂防博物館のホームページを参照（<http://www.tatecal.or.jp/haku-1.html>. 2010年8月24日確認）。
- (9) 2010年6月11日に実施した富山県埋蔵文化財センター企画調整課への聞き取り調査に基づいて記述した。「ふるさと考古学教室」は、夏休みに、小学4年から中学生と保護者を対象に同センターで行われる。このワークショップでは、勾玉、ガラス玉作り、アンギン・アジロ編み、遺跡発掘、縄文土器作り、縄文食づくりなどに挑戦し、古代人の知恵と技を体験するものである。「考古学キッズ」は、夏休みに同センターで小学4年から中学生を対象に実施するもので、前述の「ふるさと考古学教室」活動に講義を加えた体験学習教室である。また、「出前授業」のために、同センターでは、小学校向けの出前授業の利用案内リーフレットを作成し、県内の学校に配布している。実際の出前授業では、講話、ハンズオン、体験などのメニューが用意されている。同センターがまとめた「平成21年度文化庁埋蔵文化財保存活用整備事業報告」によれば、「ふるさと考古学教室」参加者は延べ707名、「考古学キッズ」参加者は延べ58名、「出前授業」参加学校37校1950名、「来館学習」参加学校37校2050名であった。
- (10) 2009年1月13日に実施した石川県立歴史博物館普及課への聞き取り調査に基づいて記述した。2007年度の石川県立歴史博物館への富山県からの入館者は、小学校43校3045名、中学校50校2724名、高校7校314名の100校6083名に達する。富山県からの小・中・高校生の入館者は同博物館に入館した小・中・高校生のほぼ3割にあたる（『石川県立歴史博物館年報（平成18・19年度版）』石川県立歴史博物館、2008年、43頁）。
- (11) 高岡市が、学校教育法施行規則55条2の規定に基づいて、2006年度から小学校5・6年と中学1年に独自に置いた科目である（高岡市教育委員会、2010年8月25日取材）。また、同科目は地域の伝統産業を体験的に学習することを目的としている。

- (12) 椎名道三 (1790～1858) は十二貫野 (黒部市) などの用水開削, 新田開発に従事した人物で, 十二貫野用水の谷越えに用いた石製導水管 (石管) が魚津歴史民俗博物館 (魚津市小川寺天神山1070の甲) に所蔵されている (魚津歴史民俗博物館, 2010年9月19日取材)。
- (13) 石黒信由 (1760～1836) は和算家・測量家で, 加賀藩の命を受けて, 現在の富山県 (越中)・石川県 (加賀・能登) の測量を行い, 精密な地図を制作した人物である。新湊市博物館 (射水市鏡宮299) には, 石黒信由のコーナー (高樹文庫) が設けられており, 彼の製作した地図 (「加越能三州郡分略絵図」など) や当時の様々な測量器具 (復元を含む) が数多く展示されている (新湊市博物館, 2010年9月19日取材)。
- (14) 2010年7月28日に実施した富山県 [立山博物館] 学芸課への聞き取り調査を行った。同博物館は, 博物館での滞在時間に併せて, 13の見学モデルコースが準備されている。また, 博物館では, 小学生を対象とした博物館ツアー「たてはく探検隊」を毎年企画したり, 県内の小・中・高校への出前講座等を実施している。富山県 [立山博物館] の学校による利用状況については, やや古いデータであるが, 同博物館がまとめた「平成16年度利用団体一覧」によれば, 2004年度の利用団体数 (見学者数) は, 小学校60校 (3989名), 中学校10校 (752名), 高校3校 (104名), 特別支援学校 (当時は養護学校) 1校 (9名) の74校 (4854名) であった。

- (15) 富山県埋蔵文化財センターの「出前授業」については, 註 (9) を参照のこと。

引用文献

- ・財団法人河川情報センター (1998) 『博物館の教育的利用に関する調査報告』
- ・財団法人日本博物館協会 (2005) 『博物館総合調査』
- ・富山県博物館協会 (1998) 『とやまの博物館をたのしむ』 楓工房
- ・文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領』 東京書籍

写真

掲載した写真は, すべて筆者が撮影したものである。

付記

本稿は, 2008年度～2010年度科学研究費補助金の基盤研究 (c) 「総合的な学習の時間で博物館を活用した国際理解を推進するための教員研修に関する研究」 (研究代表・田尻信壹, 課題番号20530845) の成果の一部である。

(2010年8月31日受付)

(2010年10月6日受理)